
カンタレラ

KU ZU O

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンタレラ

【Nコード】

N2185J

【作者名】

K U Z U O

【あらすじ】

腹ペコ少年の物語

ここからどんな物語が待っているのか？

それは作者にもわからない!？

完全に見切り発車D A Z E

プロローグ

私は飽きている。

何って、生きてること自体に飽きている。

いつも、いつも、いつも、いつも、同じことの繰り返し。

周りの連中が何でいつも笑っていられるかまったく理解しがたいわ。

今日もまた、私はパーティーへ出席しなければならない。

平民からしたらうらやましい限りかもしれないが、私は勘弁してほしい。

お母様は、

「殿方とダンスを踊ってらっしゃい、いい婿殿を見つけるのよ。」
いつも同じ台詞を吐く。

人形じゃないのだから、いい加減別のことを話してほしい。

ちなみに、私は好きな異性もいなければ、趣味もない。

私には何も無い。

こんな私を、誰が好きになるだろうか？

いや、おそらく生涯、好きだと告げてくれる人などいないだろう。

そして、私は、人形のように過ごしていくのだろう。

そう思っていた。

今日のダンスパーティーに出るまでは

プロローグ（後書き）

これから、一日でできる限りあげていきます。
ついてきてみてください。

b o y m e e t s s t e w (前書き)

腹ペコ少年 ロウ＝ラクシアルの物語の始まり
これからどうなるかは作者にもわからない！？
完全に見切り発車 D A Z E

boy meets stew

夜のラグリシア川、そこにあるタクラル橋の下、そこに、四十人は優に超える平民たちが集まっていた。

その中に、僕、ロウ＝ラクシアルはいた。

実は僕がここにいるのには理由がある。

約一時間前、ここ三日ほとんど何も食べてなかった僕は、凄くおいしそうな匂いがしたこの橋の下にやってきたんだ。

そしたら、一人のおじさんが大きな鍋にいっぱいシチューを入れて配っていて、それをみんな並んで受け取っていて、

だから僕もそのシチューを受け取ったんだ。そしたら、

「若いのに大変だな。まあがんばんな。」

っておじさんが僕に言ってきたんだ。

それから、僕が近くにあった大きな石に座ってシチューを食べていたら、周りの人たちがさっきのシチューのおじさんみたいなこと言ってきて、少しシチューを分けてくれたり、お菓子をくれたりした。

もちろんそれも全部おいしくいただいて帰ろうとしたら、みんなが川のほうに向かって並んでいたんだ。

また何かもらえるかも！って思って僕も並んだら、みんなの前に髭ボーボーのおじさんが出てきて、話し始めた。

「みんな！今日は集まってくれてありがとう。」

俺のこんな馬鹿げた作戦にこんなにたくさんの人が集まってくれるとは正直思ってた。

今日は、今日こそは、俺たちを虐げ続けてきた貴族たちに復讐をしよう！

すると、まるで地鳴りの様に大きな声で『オオ！』とみんなが答えていた。

これがさっきまでの話。

今、まさに今、みんなに銃やら剣といった武器が配られている。
僕はこれからどうなっちゃうんだろう？

b o y m e e t s s t e w (後書き)

一日で行けるところまで行きます。
見てくださったらありがたいです。

girl get xxx(前書き)

貴族の少女 レミリオンのカウラの物語

二つの視点からの別の展開

なんか無茶な気がして(ry

不愉快なほど豪華なシャンデリアの下、

赤いカーペットに彩られた趣味の悪い部屋、

窓から見える景色といえ、田んぼが近くに流れる川とそれに架かる橋くらい。

そんな都暮らしの私に言わせれば骨董品のラリアル城に私レミリオン^{II}カウラはいる。

なぜなら、そこでダンスパーティーが行われているから。

私は先程から、ダンスやお菓子、食事などに一切手を出さず外を見ていた。

なぜって、退屈だから。

何人か私に声をかけてきたけれど、さして興味もなかったので適当にあしらった。

ああ、なぜわあたしはこんな退屈な世界に生まれてしまったのか？

まるで、鎖につながれた犬ね。

そんなことを考えていると、

「お嬢さん、外を眺めるよりも楽しいことをしよう」

私よりも年上の、よく言えば大人、悪く言えばおっさんが話しかけてきた。

面倒だ。

「ごめんなさい。あなたと踊ることに興味が無いわけじゃないけれど、私はうまく踊れないの」

まあ、一応、マダムに習ったから踊れないわけではない。実は得意な部類に入るが、こう言えば大抵の男は引き下がる。

しかし、

「うまく踊れるかどうかよりも、一緒に踊ってくれるかどうかの問題だよ」

いかにも貴族らしい、キザッぽいくさい台詞をはいて、男は私の

手を取った。

そして無理やり、私を連れてホールの真ん中に立ち、踊りだした。私はこういうタイプの男が嫌いだ。

なんでも自分の思うとおりになると信じて決め付けて、他人の意見を聞きもしない。

滅んでしまえばいい。本気で思っている。

そして、ダンスが一通り終わって会食に戻ったとき、

「君が気に入ったよ。今夜、私のところに来ないかい？」

どうやらこいつが、この趣味の悪いダンスパーティーの主催者な
様だ。

boy went to the 000

僕は今、ラリアル城の石垣の下の草むらにいます。さすがに12月の草むらは寒いです。

何でも僕は、隠密行動班に配属されたそうですよ。

ええ、何がなんだかわかりません。誰かにこの状況を説明してほしいほどですよ。

とにかく、この地元でも高いと有名な石垣を登って、どこかの窓ガラスを割って進入するらしいです。窓ガラスを割るのが僕の役目だったりします。

それにしても寒い、寒すぎるので早く終わらせましょうか。

これでも運動神経には自信がある僕は、昔この石垣を登りきったことがある。

その時と同じ感覚で、石と石の間のくぼみに手を掛け、足を掛け、登りきった。意外と楽だ。

目の前には、大きな城がある。

これが目標の城のわけだけど、問題は、どここの窓を割るか。

ダンスパーティーをしているであろうメインホールは除外、目立つから。

次に、客人を迎え入れるであろうエントランスホールも警備が厳しいという理由で除外。

残っているのは、といつてもこのラリアル城には、数え切れないほどの部屋があるが、考えられるのは、ろうそくの火の着いていない部屋。

僕は、探してみた。

一番角の部屋、警備員がいるので除外、エントランスホールの奥の倉庫、怖いから却下、屋上、高い、届かない、探して、探して、探して、気がついた。

僕は何をしているんだ？何で泥棒みたいな真似をしているんだ？

あれ？えーっと？と考えているうちにちょうどいい部屋を見つけた。

警備の人はいない、暗がり、二人ほどいるけれど問題はなさそう。

ここに決めた。

配られたトンカチで窓ガラスを叩き割り、中に入って、驚愕している男性を思いっきりたたいたら失神した。

周りを見渡すと、ベッドの上に、きれいな銀髪の、人形のようにかわいい、14〜16歳あたりの少女がいた。

あまりの彼女の美しさに、僕は数分、いや数秒見とれてしまっていた。

girl look a boy

「君に今晚、僕の秘密を教えてあげるよ」だなんて言っつて、強引に私の腕を引つ張つて連れて行かれたのは、

やっぱり品のない、だらしのない、悪趣味な赤いカーペットと、その上にいかにもアンティーク臭のする天蓋付のダサイ、そして古いベッドしかない部屋。

つて、これつてやっぱり私をた、たたたたたた、食べてしまうおつもりかしら？

いやいやいやいやいや、それはいでしょ、私まだ14歳だし、かわいいつて言つても、まだまだ青い、成熟しきつていない美しさつて言うか、

そんなことを考えていると、またもや強引に、ベッドに押し倒された。

ああ、結局こうなるんだ

なんだ、この人ロリコンか

「美しいよ、美しすぎる！まるで人形のような美しさだ！」

いきなり興奮しだしたこの変態ロリコン野郎

私の純潔もここまでかと思つていた矢先、

いきなり窓ガラスが割れた。

そして、その破片という破片が、変態ロリコン野郎に突き刺さり、顔面に一筋の赤い線を作つて倒れた。

さらに私を驚かせたことがある

それは、

目の前に、暗く、青い髪と透き通る青い目、光の反射を浴びているからかものすごく白い肌。

そんな整った顔立ちで、年齢は私と同じくらい、

でも、服は見てわかるほど、ボロボロで、何年も着まわされているからか、袖の短い平民の服。

そんな、そんな格好をしているのに、私は少し見とれてしまっていた。

私はうれしかった。

こんな気持ちは久しぶり。

世界が、退屈ではなくなった。

girl look a boy(後書き)

めっちゃおくれてすみませんでしたorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2185j/>

カンタレラ

2010年10月9日01時13分発行